

# 麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 獣医学科

職階 教授

氏名 平 健介

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

# 1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

寄生虫感染あるいは寄生虫病は産業動物獣医療あるいは伴侶動物獣医療等において発生頻度が高く重要性が高いことから、獣医寄生虫学関連科目の教育活動は重要である。特に獣医学科の学生は、発生頻度の高い寄生虫病の診断・治療・予防に関する知識・技術の詳細を卒業までに身につける必要がある。獣医学科学生がこれらを要領良く修得するための教育を行うことが、獣医寄生虫学教育者の責任である。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
獣医寄生虫学Ⅰ（獣医寄生虫病学を含む）	獣医学科	必修	3	140
獣医寄生虫学Ⅱ（獣医寄生虫病学を含む）	獣医学科	必修	2	140
獣医寄生虫学実習	獣医学科	必修	3	140
獣医学概論	獣医学科	必修	1	140
総合獣医学	獣医学科	必修	6	140
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5	11
卒業論文	獣医学科	必修	6	1
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	1
動物人間共生論	動物応用科学科	選択	2	50
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	1
牧場実習	動物応用科学科	選択	2	50
動物応用医科学特論Ⅰ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	1	1
動物科学特論Ⅱ	獣医学専攻	選択	2	1
動物科学特論Ⅲ	獣医学専攻	選択	3	3
動物応用医科学特論Ⅱ	動物応用科学専攻（博士前期課程）	必修	2	0
科学の伝達	動物応用科学科	選択	4	0
卒業論文	動物応用科学科	必修	4	0
動物感染症学Ⅱ（免疫学、寄生虫学、ウイルス学（総論））	獣医保健看護学科	必修	2	0
動物臨床検査学	獣医保健看護学科	必修	2	0
寄生虫学特論	獣医学専攻	選択	1	0
寄生虫学特別演習Ⅰ	獣医学専攻	選択	1	0
寄生虫学特別実験Ⅰ	獣医学専攻	選択	1	0
寄生虫学特別演習Ⅱ	獣医学専攻	選択	2	0
寄生虫学特別実験Ⅱ	獣医学専攻	選択	2	0
寄生虫学特別演習Ⅲ	獣医学専攻	選択	3	0
寄生虫学特別実験Ⅲ	獣医学専攻	選択	3	0
寄生虫学特別実験Ⅳ	獣医学専攻	選択	4	0
動物科学特論Ⅰ	獣医学専攻	選択	1	0

## 2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

寄生虫病の診断・治療・予防に関する知識・技術の詳細を身につけた学生が、卒業後、産業動物獣医臨床あるいは伴侶動物獣医臨床等において、それらの知識・技術を用いて活躍することは、畜産業の発展、食の安全安心および人の心の安定等への貢献を意味する。これらの社会貢献の意義は高い。なお、教科書等に記載された知識や診断技術について、完成されたものは無く、また、それらの重要性は時間とともに変化する場合が多い。従って、学生には新しい知識・技術および新しく起こり得る問題に対応できる知識や技術を教授することが必要であると考え。そのためには、獣医寄生虫学教育者が、獣医療現場における寄生虫病の発生状況等および世界各地から発信される寄生虫学に関連する重要な新しい情報を常に把握していなければならない。

## 3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

寄生虫病の診断・治療・予防に関する知識・技術の詳細を身につけた学生が、卒業後、産業動物獣医臨床あるいは伴侶動物獣医臨床等において、それらの知識・技術を用いて活躍することは、畜産業の発展、食の安全・安心および人の心の安定等への貢献を意味する。これらの社会貢献の意義は高い。なお、教科書等に記載された知識や診断技術について完成されたものは無く、また、それらの重要性は時間とともに変化する場合が多い。従って、学生には新しい知識・技術および新しく起こり得る問題に対応できる知識や技術を教授することが必要である。そのためには、獣医寄生虫学教育者が、獣医療現場における寄生虫病の発生状況等および世界各地から発信される寄生虫学に関連する重要な新しい情報を常に把握していなければならない。

### (1) アクティブ・ラーニングについての取組

有

寄生虫の形態および動態を知ることが、寄生虫病の診断には重要である。生身（なまみ）の動く寄生虫を獣医療現場から確保し、実習用教材には出来るだけ生身（なまみ）の動く寄生虫教材を用い、自分の目でそれらを学生が検出・観察するようにしている。なお、生身の検体を用いる場合は、バイオリスクについては十分に考慮し、安全に実施している。

### (2) ICTの教育活用

有

寄生虫の形態および動態を知ることが、寄生虫病の診断には重要である。講義などの教材には、静止画だけでなく出来るだけ動画を用いるようにしている。また、講義を担当した場合は、同講義を録画している。これらの講義動画は、オンデマンドで配信している。

## 4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

### (1) 教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

学生が学習したことを自分で説明する時間を講義あるいは実習の時間の中に設けている。

### (2) 学生の理解度の把握

A

講義では毎回小テストを行っている

### (3) 学生の自学自習を促す工夫

B

講義で毎回行う小テストで良い成績をとるためには、自習が必要であることを事前に通知している。

### (4) 学生とのコミュニケーション

A

実習では、積極的に教員へ話しかけるように促している。講義においては、勉学に不安がある場合は遠慮なく相談するように伝えている。

### (5) 双方向授業への工夫

A

質問や意見があればメールや口頭で受け付けるようにしている。

### (6) 国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

A

過去の問題を確認し、重要性および出題傾向の高い項目を把握し、それらについての説明講義に取り入れている。

## 5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

### (1) 授業評価アンケート結果の授業への反映

学生からの要望について、可能な限り、対応した。

## (2) (1)の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

概して改善できたと思われるが、次年に同様の要望を受けることもあった。

## (3) (2)を踏まえた次年度の取組

学生からの要望は、可能な限り反映させたいと、常に考えている。

## 6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

### (1) 現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

楽しく学ぶことが重要である。獣医療現場における寄生虫病の実態をなるべく実感してもらうような教育を心掛けている。生身（なまみ）の寄生虫検体を獣医療現場から確保し、実習用教材等にはそれらの寄生虫教材を用い、自分の目でそれらを学生が見つけ出し、観察するようにしている。動く寄生虫を自分で見つけた時の学生の目は輝いている。

### (2) (1)の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

特になし。

## 7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

各種FD研究会に参加している。得られた情報の中で取り組むべきと考えられた事柄については、授業や実習に取り入れるようにしている。

## 8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

寄生虫病あるいは寄生虫感染は産業動物獣医療あるいは伴侶動物獣医療等において発生頻度が高く重要性が高い。従って、国家試験出題数も寄生虫学関連問題は比較的多い。目標として、国家試験における寄生虫学関連問題の正答率向上を掲げ、教育研究活動に励みたい。

## 9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

授業や実習において用いる説明用資料や配布資料などがそれに当たる。